



海外 博物館 事情

ロシア



自由と想像

ロシアの博物館展示が教えるもの

ム カイダイス

穆愷黛絲 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)

サンクトペテルブルクにはロシアが世界に誇るエルミタージュ美術館をはじめ、数多くの博物館や美術館があります。今回は、エルミタージュ美術館の「マンネルヘイム～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」、ロシア中央海軍博物館「日ロ文化交流150周年記念・日本の春2005展」、ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館「長崎原爆展」の3つの企画展示の現地参観を通してロシアの博物館事情を紹介します。

1 国立エルミタージュ美術館

1764年、時の女帝エカテリーナ2世がベルリンから225点の絵を購入し、その保管のためにペテルブルクの王宮・冬宮に付属の別館を造り、エルミタージュ（フランス語「隠棲所」の意）と名付けました。「エルミタージュの宝物を鑑賞しているのは、ねずみと私だけ」とエカテリーナ2世が友人宛てに書いた手紙にあるように、エルミタージュ美術館の始まりは彼女の個人コレクションでした。その後、所蔵品の増加とともに、エルミタージュは幾度も増築され、1764年から1775年にかけて小エルミタージュ、1771年から1787年にかけて大エルミタージュ、1783年にエルミタージュ劇場、1852年2月7日に新エルミタージュがそれぞれ完成しました。1917年の十月革命は、エルミタージュにも大転機をもたらしました。旧ソ連政府の「歴史的記念物の保護と国家への譲渡に関する法令」により、エルミタージュの経営は国家事業となり、旧貴族らの個人コレクションも収納され、その所蔵品の数は飛躍的に増えました。1981年にメンスキー宮殿、1982年、冬宮そのものも博物館の一部として開放されるようになったのです。現在のエルミタージュは、この6つの建物と所蔵品が300万点を超え、イギリスの大英博物館、フランスのルーブル美術館と並んで、世界三大博物館の一つとなりました。一つの所蔵品を見るのに1分かかるとしても、エルミタージュ所蔵品をすべて見るのに15年はかかると言われています。

紹介する最初の展示は、2004年12月25日から2005年6月5日までエルミタージュで催された「マンネルヘイム

～ロシアの将校・フィンランドの元帥展」です。フィンランドがロシアの公国だった時代、ロシアの将校として日ロ戦争に参加し、後にフィンランドを独立に導き、フィンランドの初代大統領を勤め、今では「フィンランド建国の父」と呼ばれる彼は、1906年から1908年にかけてサンクトペテルブルクから探索旅行に出発し、中央アジアを通過して、西安、北京、日本の長崎、舞鶴にまで来ました。今回は彼の生涯に関する写真や膨大な品々とともに、中央アジアで彼が撮影したウイグル人の写真30点、彼が持ち帰ったとされる、ウイグル人の民族衣装5点が小エルミタージュの一室に展示されていました。ウイグル人の生活、人間関係、食物、服装、笑顔など多岐にわたったそれらの写真は、同じウイグル人の私に当時の社会状況をはっきりと伝えてくれました。時代に翻弄されながら生きていく人間の瞬間の表情をカメラに収め、その表情に焼き付けられた時代を見せてくれる「写真」の持つ力に改めて気付かされ、また「非文字」資料という言葉の意味を自分なりに理解することができました。

2 ロシア中央海軍博物館

ロシア中央海軍博物館はネヴァ川河口に突き出した岬、かつての商品取引所の場所にあり、エルミタージュとは川をはさんだ向かい側に位置します。その歴史はピョートル大帝時代の1709年に船の模型と設計図を保存するために造られた「模型貯蔵室」から発展し、1805年にロシアの海に関する資料を集めた海事博物館として設立され、1939年8月に初めてロシア中央海軍博物館としてオープンしたものです。そして、ここには1854年に日本に來航したプチャーチン提督とともにディアナ号で下田に來たアレクサンドル・モジャイスキー大尉の肖像画と、モジャイスキーの有名な作品である「下田の情景」、彼が当時の日本を描いた絵25点が丁寧に保管されていました。

紹介する二つ目の展示は日ロ友好協会、サンクトペテルブルク国際協力会、日ロ文化交流センター、ロシア中央海軍博物館、ロシア海軍国立文書館などの共催によるもので、2005年3月24日から5月31日までロシア中央海

軍博物館で行なわれた、「日ロ文化交流150周年記念・日本の春2005展」です。ロシア人画家のナターリア・マクシモワがプチャーチン使節団の訪れた場所を2004年10月11日から12月11日の2ヶ月をかけ、その足跡を辿って描いた36点の絵が展示されていました。モジャイスキー大尉とナターリアの絵を見比べることにより、日本の150年前の人々、風景とその現在との対比、そして日ロ交流の長い歴史の流れが理解できます。当時のモジャイスキーの絵は鉛筆で描かれたモノトーンの色であるのに対し、ナターリアの絵は日本を意識した淡い色彩で描かれており、この色を通して「昔」と「今」の記憶が「区別」され、そしてまた時間を越えて見事に「つながれた」新しい試みです。

3 ロシア国立サンクトペテルブルク歴史博物館

アングリースカヤ河岸44番地にあるこの博物館は、旧ペテルブルグ博物館(1907年)と市行政局(1908年)のコレクションを基に1918年に造られ、第二次世界大戦下の1941年9月8日～1944年1月27日までの900日間のドイツ軍による「レニングラード包囲」などの第二次世界大戦の記録のほか、20世紀初頭の庶民の生活の様子などが展示されています。

レニングラード包囲で家族すべてを失い、やがて疎開先で自身も亡くなった少女ターニャ・サビチェワの残したメモ「ターニャの日記」もここに保管されています。

紹介する三つ目の展示はこの博物館の常設「長崎原爆展」です。展示には長崎の原爆投下時の写真や被爆した品々とともに、第二次世界大戦下の独ソ戦の写真も展示されていました。展示室の一番目立つ所に大きくヒトラーの無表情な写真が掲げられ、その周りには空撃する爆撃機、被爆した長崎の子供達、長崎の原爆で亡くなった

ロシア人将校の肖像画や墓などの写真があり、長崎被爆の状況だけではなく、その時代背景と戦時下の国々、戦争に巻き込まれた人々の悲しみが胸に伝わりました。

これらの博物館には展示に関するパンフレットがないため、展示場の学芸員に詳しい解説を求めたところ、「ロシア語が読めるのなら、解説を読んでください」と言われただけでした。ロシアの博物館は、「親切さ」と「丁寧さ」に欠けても、あるテーマに「限定」して、主催者側が意図したものだけを訪れた人に理解してもらおうという展示の仕方と違います。限られた予算の中で優雅にそして大胆に、ある「できごと」をその時代背景、歴史の流れ、その時の世界情勢などの大きな枠の中に置き、見る人の想像力を刺激し、全体を通してものごとを理解させるような展示を意図しています。見る人がそこから自由に必要な情報を受け取り、理解を深めていくのです。つまり、それは表面と形式の完璧さをどこまでも追い求める展示の仕方ではなく、「ものごと」の本質に迫る展示方法なのです。

今回の現地調査は、理解に苦しむように高く設定された外国人料金、劣悪なトイレ事情、長すぎる昼休み時間などの旧ソ連時代の習慣がそのまま残されていること、と同時にロシアという国の歴史と文化の奥深さとスケールの大きさを体験できた調査でした。

参考文献

- Морской музей России 《ИПК Бионт》1993
- Государственный Эрмитаж Санкт-Петербург 《Альфа-Колор》2000
- Миссия В Японию Санкт-Петербург 《Ленэкспо》2005
- www.spbmuseum.ru

写真1



エルミタージュ美術館展示風景

写真2



150年前の函館(ロシア中央海軍博物館)

写真3



「長崎原爆展」より(サンクトペテルブルク歴史博物館)

写真は全て筆者撮影。